

一モセット類は通常生活において何ら異常を認めないことから、糖代謝についても今後十分な検討を必要とすると考えられる。

正中矢状断面からみたマカク類頭蓋の性差および種間差

— fascicularis group に関して —

安井金也 (京大・理)

マカク属の中で、資料が比較的多く得られた、*fascicularis* group (Fooden, 1976) について矢状断輪郭におけるアロメトリー分析を行った。また、新たにヤクザルを含め、同グループ内での形態的位置付けを試みた。

アロメトリー分析においては、独立変数に矢状断面面積、従属変数に、その図心から各輪郭への半径長を用いた。グループ内全種で、共通に認められるのは、鼻骨の陥凹部 (側面観による) が、負のアロメトリーかそれに近い群内変異を示し、梨状口上部周辺は、逆に正のアロメトリーかそれに近い変異を示す。それに対し、基底部は、大きさに関係する変異を示さない。雄だけに特異的にみられるものとして、骨口蓋の正のアロメトリーがあげられる。項面は、正のアロメトリーを示すもの、アカゲ雄^{*}、カニクイ雌^{*}、ニホン雌^{*}、タイワン雌と、負のもの、カニクイ雄、ヤク雄、アカゲ雌、ヤク雌の2つのタイプが認められる。頭頂骨後部でも、同様に、カニクイ雌雄^{*}で正、ニホン雌雄^{*}、アカゲ雄^{*}は負のアロメトリーである。前頭骨は、ニホンザルを除き、負のアロメトリーかそれに近いものであるが、ニホンザルは逆に、正の傾向を示す。眼窩上隆起は、雌で正のアロメトリーを示す傾向があり、雄ではイソメトリックである。このグループで、ニホン、ヤクザルの両雄は、アロメトリックな変異が少なく、イソメトリックな群内変異をもつと考えられる。

ヤクザルの形態的位置は、輪郭の形態距離において、ニホンザルに最も近く、それは、雄で他の種間距離平均の約60%である。これに近いのは、タイワン・カニクイの値である。雌は、ヤク、ニホンザルが他の3種と分かれるが、両群の距離は他の3種間の距離と変わらない。大きさは、ニホンザルより明らかに小さく、雄はタイワン、雌はアカゲに近い。ニホンザルとの平均図形の比較で

は、雌雄とも、前後径が有意に短い。

(* : 有意)

サルにおける主として消化器系ズノーシスの病原学的並びに血清学的研究

金城俊夫 (岐阜大・農)

最近、ヒトの腸炎あるいは食中毒の起因菌として注目されてきたカンピロバクター及びエルシニアを中心に消化器系人畜共通伝染病の病原体についてサルの保菌状況を調査した。

調査したサルは屋内ケージ飼育のもの延べ320頭及び野外放飼場で群飼育のもの延べ177頭、総計497頭で、その新鮮排泄便を供試した。

その結果、カンピロバクターが39頭7.8%から分離された。分離率は下痢便19.6%、軟便15.7%及び正常便4.5%であった。39頭中27頭から *C. jejuni* が、残り12頭から *C. coli* が分離された。特に頑固に下痢あるいは軟便が持続する個体から *C. coli* が長期間分離されたことは、本菌種のヒト腸炎起病性を考える上にも興味ある成績である〔第97回日獣学会 (1984) 発表〕。

エルシニア属菌は32頭6.4%から分離された。分離率は便の性状とは関係なかったが、屋内ケージ飼育サルで0.9%に対し野外飼育サルでは16.4%と高率であった。菌種別の分離率は *Y. kristensenii* 3.6%, *Y. frederiksenii* 1.6%, *Y. enterocolitica* 1.0%, *Y. intermedia* 0.8%及び *Y. pseudotuberculosis* 0.4%の順であった。ヒトに対し病原性が示唆されている *Y. enterocolitica* 0:6,30 B:1及び *Y. pseudotuberculosis* III型菌が僅かながら正常便から分離された。しかし、サルモネラ及び赤痢菌は全く検出されなかった〔第98回日獣学会 (1984) 発表〕。

一方、某野猿公苑で感染症と思われる疾病の小流行があり、その死亡サルのウイルス学的検索を行ったところ、SV40を分離した。本ウイルスが流行の原因であるかの確認はできなかった。しかし分離ウイルスに対する免疫粘着赤血球凝集反応による抗体調査では、該猿苑の8頭は100%陽性 (平均抗体価210) で、他の7群81頭でも76%が陽性 (平均抗体価89.9) であり、SV40の不顕性感染がサルの間を高率にあることが示唆された。